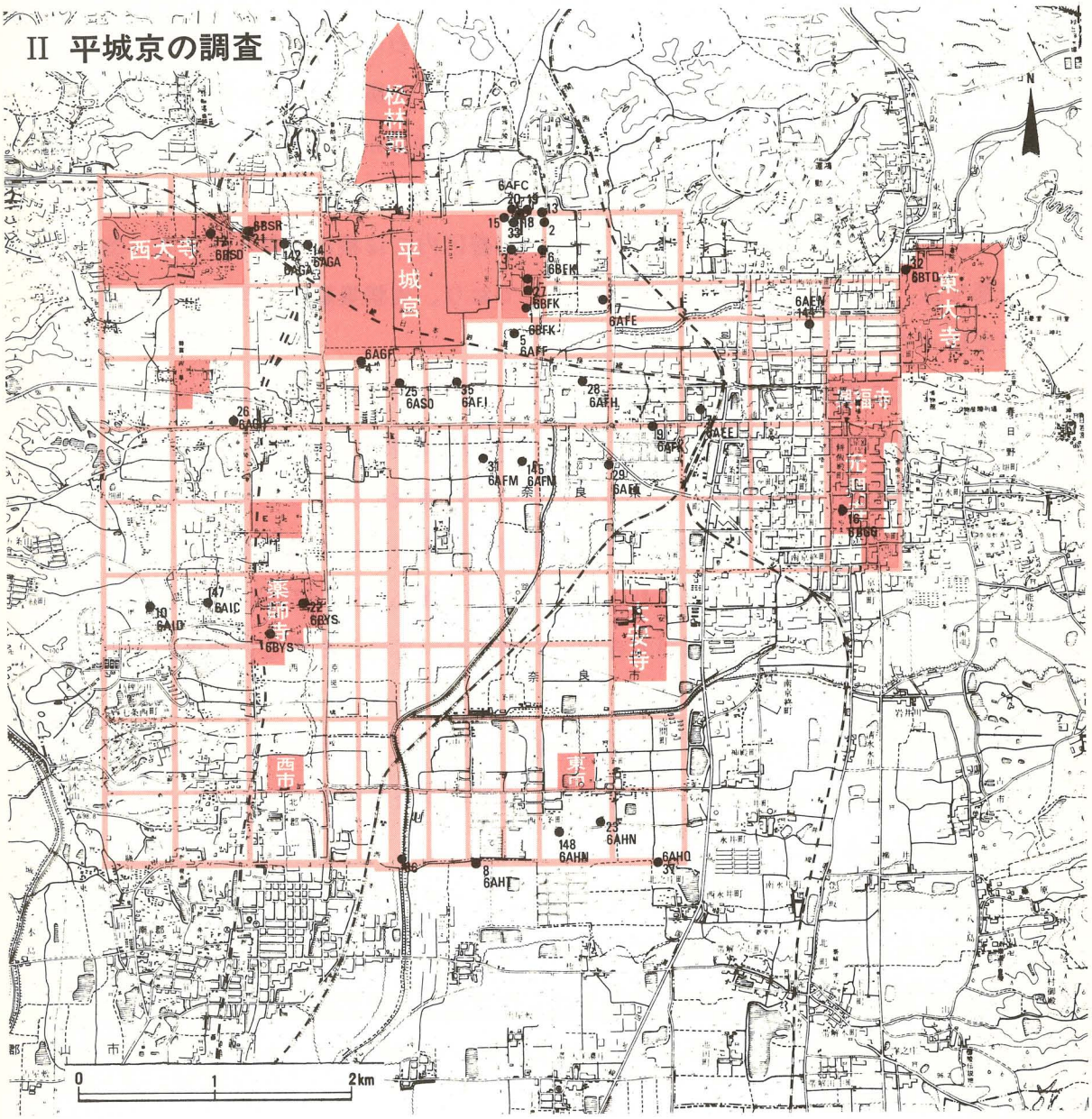


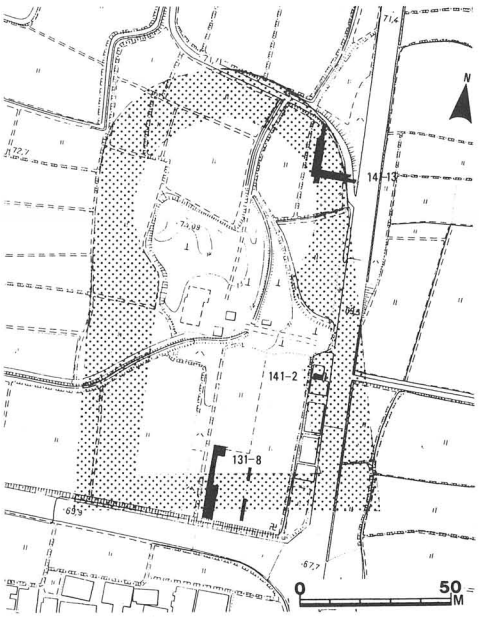
第14図　昭和57年度　平城京内発掘調査地一覧　※は未収録　未収録は巻末参照

昭和57年度　平城京内発掘地一覧

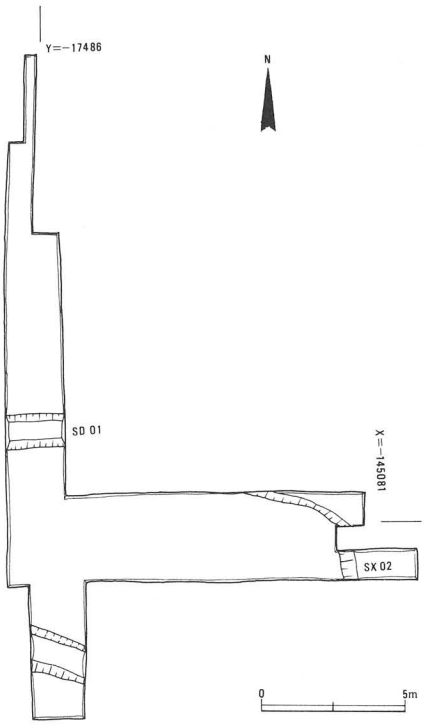
次数	調査地区		面積 m²	調査期間	備考	担当者
141－13	左京一条二坊・三坊	法華寺町1170－21	72	82' 7.6－7.12	岡本茂雄 木村光夫宅	千田剛道
141－ 2	左京一条三坊二坪	法華寺町1136－6	12	82' 4.8－4.12	黒文雄宅	山本忠尚
141－19	左京一条二坊内小路上	法華寺町1095－9	17	82' 8.16－8.22	川崎裕久宅	工楽善通
141－20	*左京一条二坊九坪	法華寺町988－2	7.5	82' 8.16－8.22	土方常孝宅	工楽善通
141－15	左京一条二坊坊間路	法華寺町中ノ段988－25	7.5	82' 7.20－7.22	直地寅三宅	工楽善通
141－18	*左京一条二坊十坪	法華寺町988－28	8	82' 8.11－8.12	阿部博宅	工楽善通
141－33	*左京一条二坊坊間路	法華寺町988－4	10	83' 2.9	野呂共栄宅	加藤充彦
141－25	*朱雀大路	二条大路南3－1－　193	140	82' 11.8－11.16	奈良市	宮本長二郎
141－ 5	左京二条二坊十三坪	法華寺中町五双田	275	82' 5.10－5.26	塚本宗敬 杉本繁次郎宅	松村恵司
144－ 1	*外京二条六坊十一坪	北魚屋西町	550	82' 6.24－8.24	奈良女子大学	上野邦一
141－17	左京二条三坊十六坪	法華寺町5番地	270	82' 7.28－8.18	浅川組	深澤芳樹
141－35	左京三条二坊七坪	二条大路南1丁目108－1	356	82' 3.11－4.12	武田保宅	松井　章
141－28	左京三条三坊七坪	大宮町6－26	53.6	82' 12.3－12.10	第百生命	立木　修
141－ 7	左京三条五坊四坪	大宮町1－64－1,4.5.6	300	82' 5.27－6.12	大同建設	西　弘海
141－31	左京四条二坊三坪	四条大路南1－9	250	83' 1.10－1.27	山形病院	毛利光俊彦
145	左京四条二坊十五坪	尼ケ辻町田村川	600	82' 10.8－11.9	三和住宅	立木　修
141－29	左京四条三坊十二坪	三条桧町410－1	160	82' 12.13－12.21	辻マンション	宮本長二郎
141－ 9	*左京四条四坊九坪	三条宮前町3－6	600	82' 6.24－7.10	白藤学園	工楽善通
148	左京九条三坊三坪	西九条町4－1－9,1－12,13	900	83' 2.22－3.30	植田又治	毛利光俊彦
141－23	*左京九条三坊十・十一坪	東九条町419－1	180	82' 10.4－10.27	奥野十二郎	金子裕之
141－36	*羅城門北方	大和郡山市	80	83' 3.15－3.25	県道城廻線	森　郁夫
141－37	*左京九条大路	奈良市北之庄町	220	83' 3.22－4.1	奈良市都市計画局	亀井伸雄
141－ 8	左京九条大路南辺	大和郡山市下三橋	500	82' 6.14－6.29	北和木材	山本忠尚
142	右京一条二坊六・十一坪	西大寺栄町2314－1	900	82' 4.15－5.13	紙谷昭義宅	山本忠尚
141－14	右京一条二坊三坪	二条町二丁目60の1	113.7	82' 7.12－7.15	河村正治	深澤芳樹
141－ 4	右京三条一坊坊間路	二条大路南四丁目5－15	25	82' 6.10－6.11	下垣内勝友	山岸常人
141－26	右京三条三坊五坪	宝来町90－4・91－1	626.5	82' 11.11－12.4	松田喜一 喜多徳憲	金子裕之
147	右京六条三坊十坪	六条西町1－421－27	996	83' 1.24－3.16	財務局	森　郁夫
141－10	*右京六条四坊七・十坪	六条町	57	82' 6.28－6.30	奈良市民生局	千田剛道
次数外	薬師寺中門	西ノ京町460	670	82' 8.23－10.4	薬師寺	本中　真
141－22	薬師寺旧境内	西ノ京町283－1	24	82' 9.16－9.23	増田伊佐男宅	千田剛道
141－ 1	法華寺旧境内	法華寺町446－1	110	82' 4.7－4.22	清水彦一宅	山岸常人
141－ 3	法華寺旧境内	法華寺町870	6	82' 4.26－4.27	塚本宗敬宅	西　弘海
141－ 6	法華寺旧境内	法華東寺町409	11	82' 5.18－5.19	増田有紀宅	山本忠尚
141－27	*法華寺旧境内	法華寺中町五双田	6.67	82' 11.25	中谷義雄宅	内田昭人
次数外	法華寺旧境内	法華寺横笛堂跡地	17	82' 7.2－7.3	法華寺	千田剛道
141－32	東大寺西面大垣	手貝町53・雑司町87・88	230	83' 1.27－2.18	東邦生命	亀井伸雄
141－12	西大寺旧境内	西大寺小坊町6－7	5	82' 7.1－7.2	岡本保司宅	今泉隆雄
141－21	西隆寺旧境内	西大寺本町勘定219－1	96	82' 9.13－9.17	木下創介	上野邦一
141－16	元興寺旧境内	芝突抜町1	11.3	82' 7.26	宮本幸正宅	工楽善通
次数外	*法隆寺旧境内		15.5	82' 7.2－7.3	防災関連調査	

* 印は本文末収録　未収録については巻末参照

1　左京一条二坊・三坊の調査　第141－13次



第15図　木取山古墳周辺調査地点



第16図　左京一条二坊発掘遺構図

本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査地はコナベ古墳の南200ｍで、56年度の131－8次調査で検出した木取山古墳の東周濠推定地にあたり、東二坊大路関係の遺構の存在も予想された。

調査地は、水田床土の直下が地山面（バラス混り黄褐粘土）であり、奈良時代及びそれ以降の遺構面は削平されているらしい。検出した遺構はすべて地山面から確認した。主な遺構として東西溝と落ちこみがある。

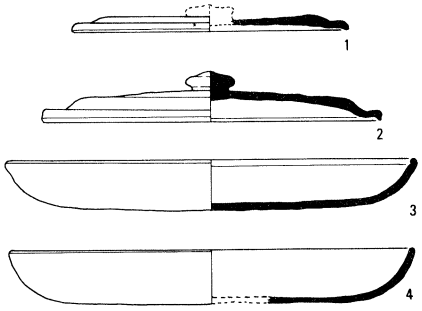
東西溝SD 01は幅1ｍ、深さ0.5ｍで、上下2層（上層：灰褐粘質土・下層：灰色砂）の堆積層が認められ、8世紀の土器が出土した。

落ちこみSX 02は、深さ1.5ｍで調査地の北および東へ広がる。落ちこみ内埋土には8世紀の土器を含む。

その他、調査地南端に地山の低い高まりとそれに沿う細溝を検出した。細溝内には遺物がない。削平前の地形の起伏を留めているかもしれない。

東西溝SD 01溝心の座標はY＝－17486.0の位置でX＝－145077.8で

ある。この数値からするとこの溝は、左京一条二坊一・二坪の坪境付近にあたる。このことから、道路側溝の可能性も考慮して調査を進めたが、北12m、南9mの間には対になる溝は存在しないことがわかり、条坊との関連はなお明確にしえなかった。一方、落ちこみSX 02は、埋土には埴輪は全くみられないなど、昨年度調査の木取山古墳南周濠SD 2251の状況とは異なる。したがって現時点ではなお、古墳周濠であるか否かは即断できない。東西溝との関連も不明である。



第17図　東西溝SD 01出土土器　½
須恵器1,2　土師器3,4

ところで、この付近における東三坊大路の位置には、海竜王寺以北では東に寄る説もあり、この説にもとづけばこの落ちこみが東二坊大路の西側溝である可能性も残っている。また、先の東西溝もこの説によれば、条坊の番付が変わり、左京一条二坊十五・十六坪付近となることも付記しておく。

2　左京一条三坊二坪の調査　第141－2次

住宅新築に伴う事前調査。対象地は左京一条三坊二坪に位置し、東二坊大路を海竜王寺東限線の北延長上に求めるならば、大路西側溝にかかる可能性があり、また56年に発見された木取山古墳の東裾ないし周濠西端にあたると推定された。

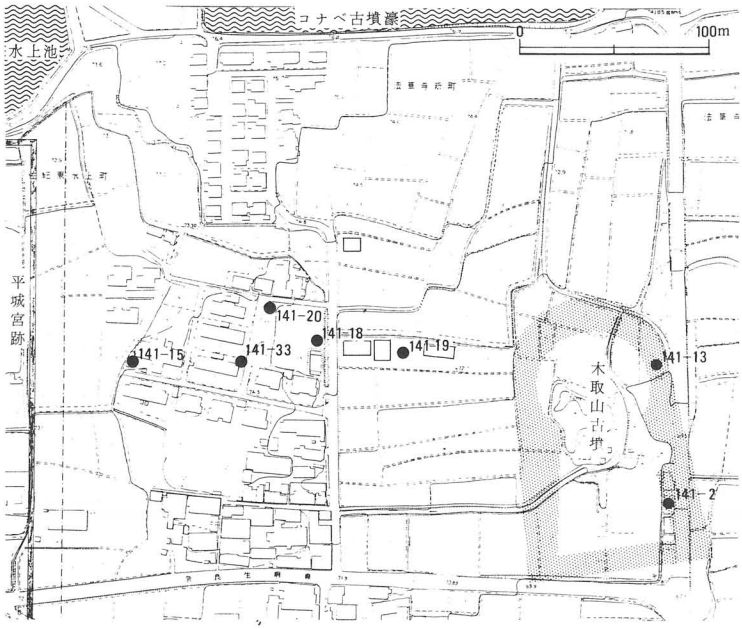
調査の結果、発掘区東端で南北溝1、西南で隅丸方形の土壙1を検出した。南北溝は西半分を発掘したのみだが、深さ1.1mあり上下の2層に分れる。上層はごく最近の陶磁器類を含むが、下層からは瓦器に伴って石製五輪塔および地蔵像片が出土した。発掘区西寄りから東北に向って地山が傾斜する。斜面上には厚く整地土が盛られ、隅丸方形土壙も整地土と同質の土で埋められていた。この土壙埋土および整地上には奈良時代の土器・瓦が包含されており、整地は奈良時代に行なわれたものと判断できる。この地山の傾斜はあるいは木取山古墳の墳丘裾部の名残りかもしれぬ。

3　左京一条二坊内の調査　第141－19・15次

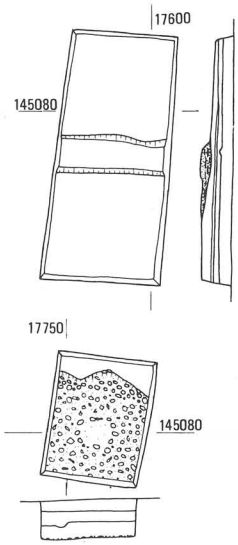
1982年度には表記条坊内で5カ所の発掘調査をおこなった。法華寺旧境内の北方にあり、通称一条通りを北へ約100ｍ余入ったところに位置し、いずれも住宅の改築や新築に伴なうもので、小面積の調査である。

第141－19次は十五坪と十六坪の坪境付近にあたり、何らかの境界施設が予想された。調査では3ｍ×6.5ｍの南北トレンチのほぼ中央に、幅約2ｍにわたる東西方向の瓦堆積があった。この瓦堆積の北側は旧耕作土下約10㎝で茶褐色粘質土の平坦な地山面があり、南側ではさらに20㎝下ったところで同様の地山面となる。瓦堆積下には、北寄りに幅約1ｍ、深さ20㎝程の東西方向の溝状落ち込みがあった。今回の調査では、この溝に側した築地等の有無は不明であった。

第141－15次は二坊々間路に東接したところにあたる。現地表面下約60㎝で中世以降と思われる南北方向の小溝一条を検出した。その下部には厚さ約40㎝の黄褐色粘土の整地層が堆積しており、その下面で拳大の礫を敷きつめた遺構を検出した。礫面で奈良時代の土器片が出土したことから、同時代の遺構とみられる。



第18図　法華寺周辺調査地点



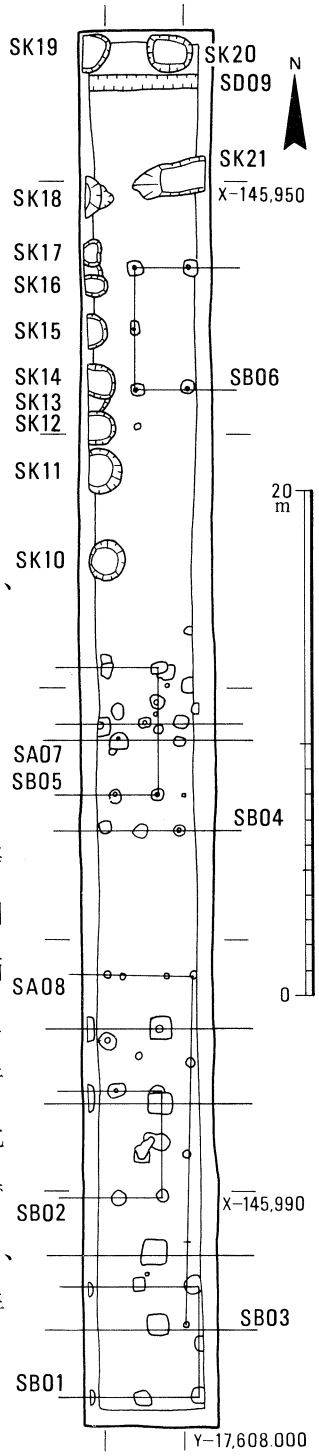
第19図　発掘遺構図

4　左京二条二坊十三坪の調査　第141－5次

本調査は宅地造成に伴なう事前調査である。調査地は平城宮東院の南東0.3㎞に位置する水田で、平城京の条坊では左京二条二坊十三坪の西南部にあたる。調査地の南端付近に二条大路北側溝の存在が予想されたため、調査地南寄りに東西5ｍ、南北55ｍの発掘区を設定して調査を行なった。調査地の基本的な層序は、現水田耕土・床土下に菰川の氾濫による灰茶褐色砂層が厚く堆積し、地表下1.2ｍで奈良・平安時代の遺物を包含する暗灰色粘土層に達する。遺構はこの層直下の灰黄褐色地山面で検出した。検出した遺構には掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土壙の他に、多数の中世の耕作溝がある。

掘立柱建物は6棟を検出したが、すべて部分的な検出にとどまり、全体の規模を知り得るものはない。SB 01・02・05の3棟はいずれも梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物の東妻部分にあたる。柱間寸法はSB 01が梁・桁行とも7尺等間、SB 02が梁行7尺等間で桁行6尺、SB 05が梁行8尺等間で桁行6尺である。SB 06は梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物の西妻部分である。一辺0.6ｍ前後の方形掘形の中に径約20㎝の柱根が遺存する。梁行は8尺等間で、確認した桁行1間分が7尺の規模をもつ。SB 03・04は東西棟建物の南北両側柱列の一部を確認した。SB 03は南北二面廂付東西棟で一辺1ｍに近い方形掘形を6箇検出した。身舎の梁行は20尺、廂の出ならびに柱間が10尺を測る大形の建物で、十三坪南半部における中心的建物と考えられる。

掘立柱塀は2条を検出した。SA 07は東西方向の塀で、1間分（8尺）を確認した。西側の柱穴には柱根の周囲を拳大

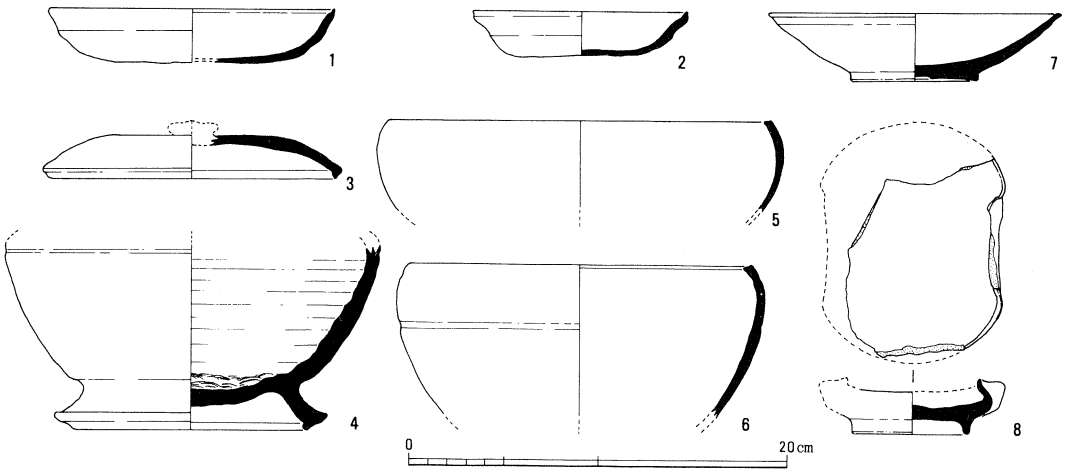


第20図　十三坪発掘遺構図

の礫で固めた工作がみられる。SA 08は南北4間分、東西1間分を確認した12尺等間の逆L字形の塀である。柱穴の形状、振れから時期が下る遺構と考えられる。

溝は1条を検出した。SD 09は幅0.6 mの素掘りの東西溝で、埋土中に少量ながら奈良後半の土器と瓦を含む。この溝は、本調査地の2筆東の水田で昭和52年度に行なった第131—31次調査で検出した道路状遺構の南側溝の西延長部にあたる。土壙は12基を数えるがすべて調査区の北半部から集中して検出された。SK 21は、幅1.3 m、長さ3 m以上、深さ0.5 mの土壙で、他と形態を異にしている。埋没途上に焚火がなされ埋土中位に木炭・木屑層がレンズ状に堆積する。SK10～20は、いずれも径1～1.8 mの不整円形を呈する土壙で、深さは0.7 m前後。埋土中から曲物の側板片を出土する例もあり、多くは井戸として使用された可能性がある。SK 18・21から接合する緑釉埦（7）が、SK 15から灰釉耳皿（8）が、SK 16からは13世紀末の土師器（2）が出土した。

調査では発掘区の関係から当初予測した二条大路の北側溝を検出することはできなかったが、数期にわたる遺構を検出し、十三坪の土地利用状況の一端を明らかにすることができた。中でもSD 09は十三坪を南北に二分する東西小路の南側溝に相当し、調査地南半で検出した大形建物SD 03の存在とともに、奈良時代後半期に½坪利用の宅地割を想定させるものとなっている。また、平城京廃都後も宅地として利用された可能性があり、周辺地域の調査の進展が待たれる。



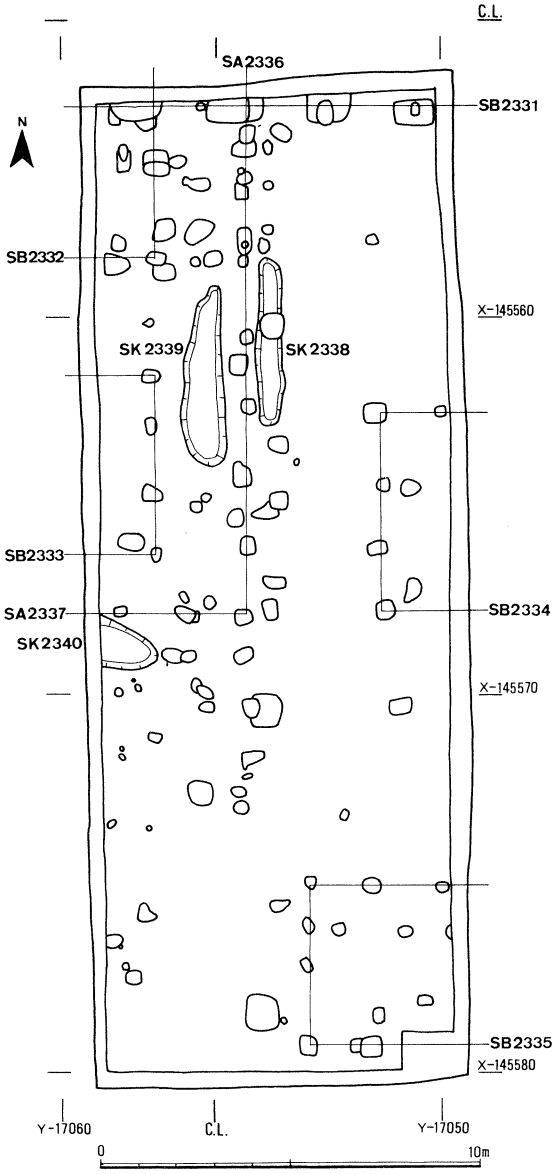
第21図　土壙　出土土器　SK 10　1・3～6, SK 16　2. SK 18・21 7, SK 15 8

5　左京二条三坊十六坪の調査　第141－17次

当該地は平城京左京二条三坊十六坪の中央やや南寄りを占めており、福山敏男氏等によって阿閦寺の存在が推測されていた。東西10ｍ、南北27ｍの発掘区を設定し、調査した。

土層の状況は上から旧耕土、旧床土、灰砂、淡褐土、赤褐土の順で、黒色粒混赤褐砂地山、あるいは、明黄褐細砂地山に至る。地表からの深さは、総じて0.7 ｍである。淡褐土上面で足跡を多数検出した。ヒトと小型偶蹄類のそれであるが、組み合わせや方向性などの規則性は認められない。淡褐土は瓦器を包含するので中世以降の所産である。赤褐土面には縦横に走る耕作溝がある。出土遺物は、ほとんど奈良時代のもので、廃都直後に造成された水田に伴う可能性もある。奈良時代の遺構は赤褐土を除去した段階で検出した。建物５・掘立柱塀２・土壙３であり、大きく２時期に区分できる。

Ａ期　一辺 1.2 ｍ四方の方形掘形をもつ SB 2331（東西３間以上 2.4 ｍ等間）がある。当十六坪の南北２分割線は、仮に１尺を 0.296 ｍに換算すれば、SB 2331の柱筋の南約８尺に位置する。東西２分割線は15’41”西に振れるため、Y=−17056



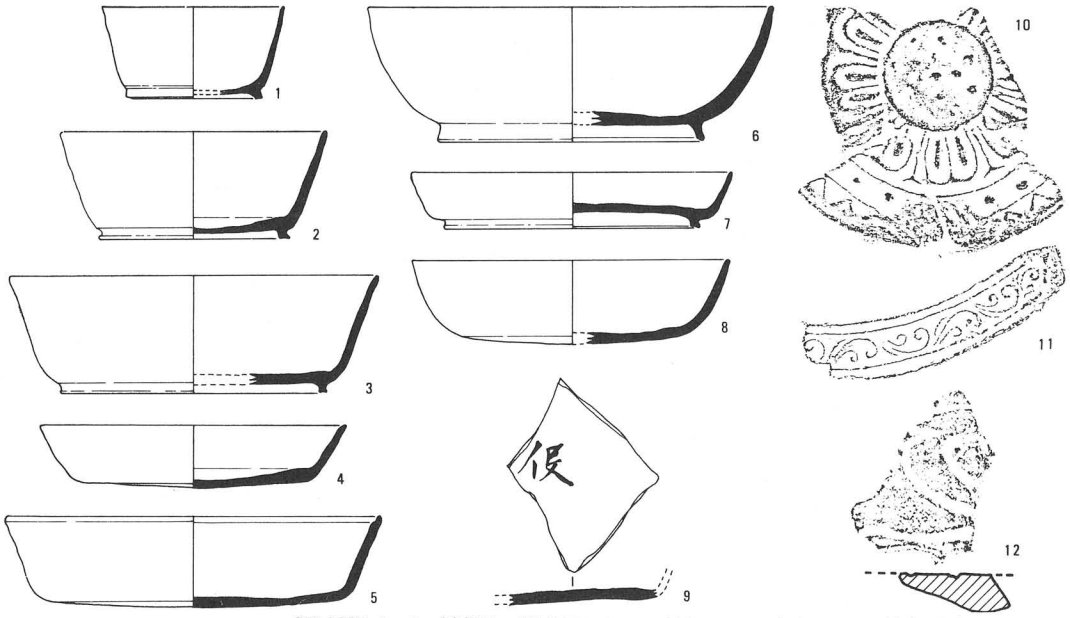
第22図　左京二条三坊十六坪発掘遺構図

のあたりを通過する。この換算法を用いれば、SB 2331は当十六坪のほぼ中央に位置する。

B期　南北塀SA 2336（7間以上1.8 m等間）とそれに鍵の手状にとりつく東西塀SA 2337（3間以上1.8 m等間）が設けられる。二つの木塀に囲まれた内側に東の柱筋を合わせた2棟の建物SB 2332（2間以上×1間以上、柱間2.4 m）とSB 2333（3間×1間以上、1.5 m等間）があり、外側には建物SB 2334（3間×2間以上、1.8 m等間）とSB 2335（2間×3間以上、南北3.4 m東西1.8 m等間）が建つ。塀SA 2336はほぼ当坪の東西2等分線上にのる。塀の内外に土壙SK 2339、SK 2338、SK 2340がある。

遺物は主に土壙、耕作溝、包含層から出土した。いずれの土壙からも奈良時代前半の土師器、須恵器が比較的多く出土した。これに共伴して、SK 2338でベッコウ、SK 2339で軒丸瓦6301（新）型式、SK 2334で墨書土器を検出した。また耕作溝と包含層から琥珀、「小君」と箆描した須恵器、緑釉波文塼、軒丸瓦6311型式と軒平瓦6719 A型式が出土している。

当発掘区と阿閦寺との関係はいまだ明瞭でない。周辺の調査を含めた今後の検討をまちたい。



第23図　十六坪出土遺物　SK 2338 1～5　須恵器　SK 2339 6～7, 須恵器　10　軒丸瓦6301（新）型式
SK 2340 8・9　須恵器　11軒平瓦6719 A型式　12緑釉波文塼（12のみ縮尺½　他は¼）

6　左京三条二坊七坪の調査　第141－35次

駐車場建設にともなう事前調査である。当坪内では西隣（第103－1次）と東隣（第118－23次）等を調査しており、南には大宮通りをへだてて六坪の宮跡庭園が位置する。第103－1次調査では宮跡庭園への導水路や建物群を検出しており、今回の調査でもその関連遺構が予想され、東西約9ｍ、南北39ｍの発掘区を設け後に一部拡張した。

層序は耕土、床土の下に厚さ10㎝前後の遺物包含層があり、更に遺構検出面である暗黄色粘質土の整地層と黄褐色シルト質地山がある。

検出遺構は掘立柱建物10、流路8以上、塀1、井戸2、土壙2などがある。それらは平城京造営以前（A期）と奈良時代（B期）に大別される。A期では自然の流路が数条ある。埋土は発掘区北部では暗褐粘質土であるが、南部では灰色砂やバラスとなり、磨耗した古墳時代の土師器片、流木などを含む。B期は遺構配置および切り合いから少なくとも以下の4期の変遷が考えられる。

B－1期　自然の流路が残り、これを切って土壙（SK10）が掘られる。埋土から平城Ⅰ期の土師器盤1、「□里人歳歳歳歳歳歳歳」と記した木簡が出土した。

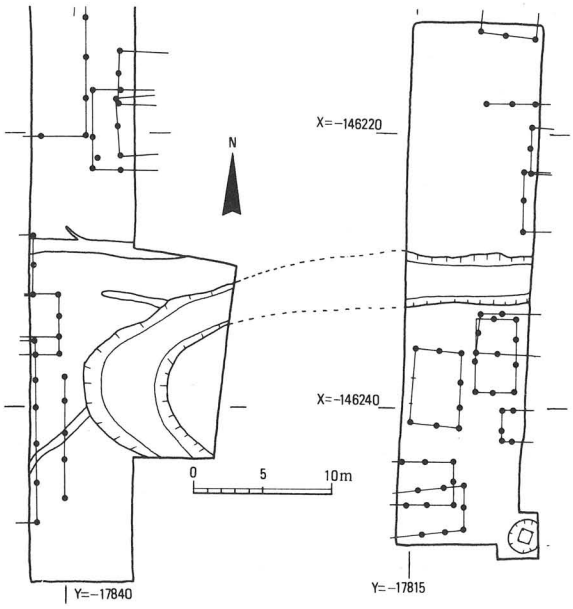
B－2期　流路を埋めたて整地を行なう。宮跡庭園への導水路SD06Aを掘削する。建物は2棟（SB 05、13）である。

B－3期　建物は4棟（SB 01、04、07、11）である。発掘区の南では土壙1、井戸2が切り合う。SE 16の枠は4本の角材に枘穴を穿ち横桟を向かい合わせで一対ずつ入れ、桟外に縦板を交互に重ねあわせたもので一辺約90㎝の正方形である。SD 06Bからは「宮」と記した墨書土器が出土した。

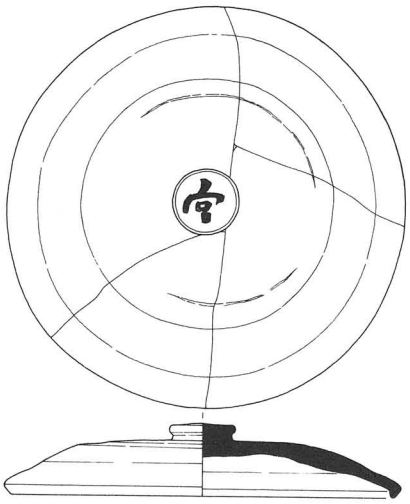
B－4期　建物は4棟（SB 03、08、12、14）である。井戸は埋められその上にSD 09が掘られSD 06Cに注ぐ。SD 06Cからは糸切底の須恵器が出土する。

まとめ　本調査地は平城京造営以前は自然の流路が蛇行していたが、造営にともなって整地され、新たに宮跡庭園の園池の導水路SD 06が掘削される。旧水路上には建物が建ち並び、井戸も設けられた。掘立柱建物は奈良時代を通じて10棟分

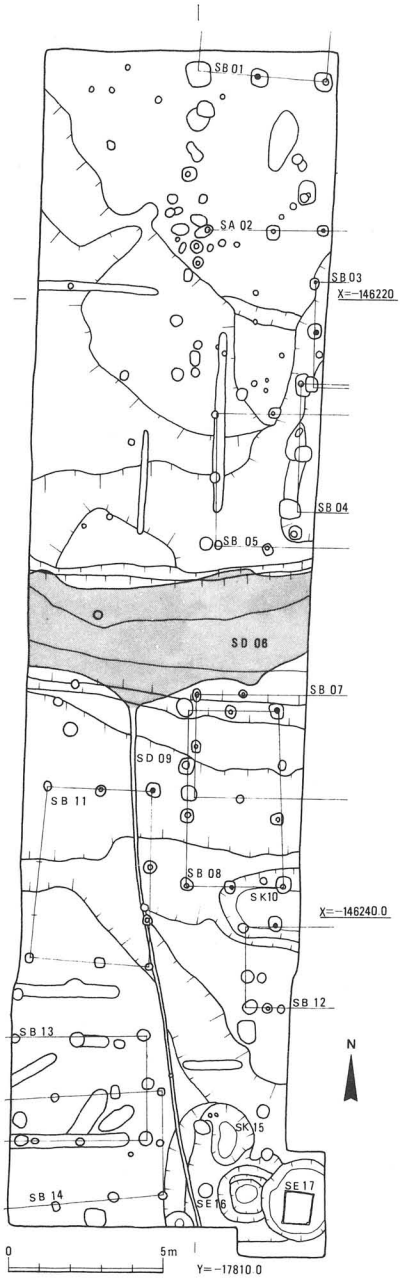
あり、3期の建て替えがある。建物はいずれも柱間が6～7尺程度の小規模なもので雑舎的な建物であろう。これは本調査地が七坪内でも西南隅に近いためと考えられる。



第24図　左京三条二坊七坪発掘全体図



第26図　SD 06 出土墨書土器



第25図　第141－35次発掘遺構図

7　左京三条三坊七坪の調査　第141－28次

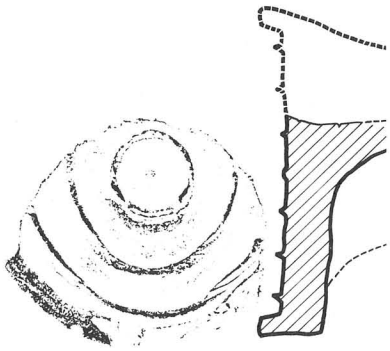
本調査はビル新築に先立つ事前調査で、遺存地割から東三坊々間路の存在が予測された。床土下の青灰粘質土面では上層遺構である巾約20㎝の南北溝８条・東西溝１条を検出した。この層は粘土と砂の細かい互層で調査地の北を流れる佐保川の氾濫による堆積と考えられる。この層の下層から奈良時代の遺構を検出。南北溝SD 2335は東三坊々間路西側溝、東肩は検出できなかったが、巾４ｍ以上、中央部約1.5ｍが一段深くなる。南北塀SA 2330はSD 2335の西３ｍにある。北側の柱穴は土壙SK 2332に破壊されたのであろう。遺物はSD 2325の溝中央から木簡、瓦、土器が出土。瓦は軒丸瓦6012Ｈ（新種）がある。木器は曲物が出土。木簡は郷里制下（霊亀六年～天平十二年）のもの。

・尾張国仲嶋郡牧沼郷新居里

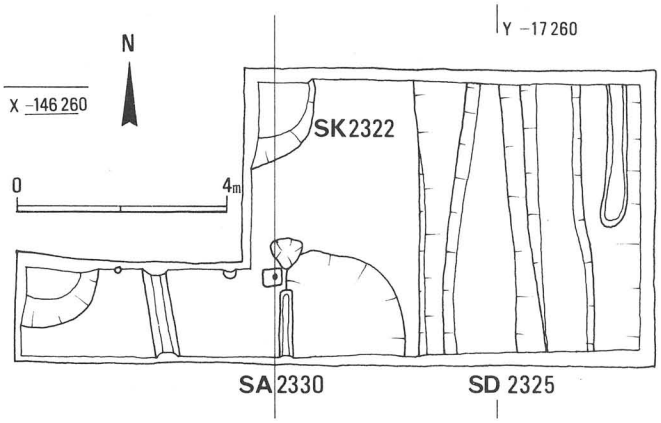
・□マ広嶋白米五斗五月一日

SD 2325と、第118－23次調査で検出した東二坊々間路西側溝との心心距離は朱雀大路の振れN 15′41″Wを加味して計算すると532.76ｍとなる。条坊計画の一坊分1800尺で除すると、１尺0.296ｍ弱となり、現在までの条坊調査による成果と合致し、SD 2325を東三坊々間路西側溝と考えることができる。この場合、東三坊々間路と同じく、巾３丈強と推定される。

東三坊々間路西側溝　X＝－146,254.563　Y＝－17,791.583



第28図　SD 2325出土軒丸瓦 ⅓

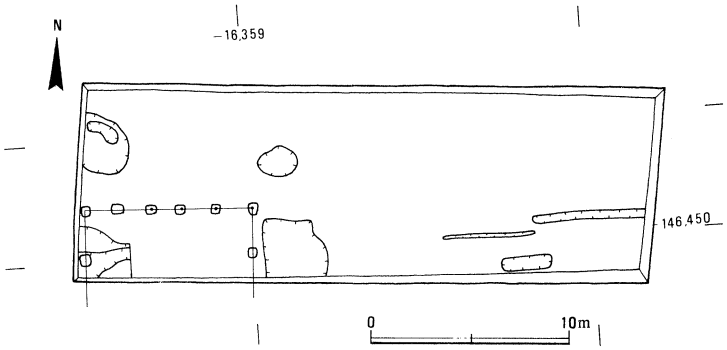


第27図　左京三条三坊七坪発掘遺構図

8　左京（外京）三条五坊四坪の調査　第141－7次

奈良市大宮町1丁目64－1, 4. 5, 6番地所在のサカイヤ地所KK所有地におけるマンション建設の事前調査として実施したものである。当該地は平城京の外京左京三条五坊四坪の東北部にあたり、東を限る南北の市道が四坪・五坪間の坪境小路に相当する。947㎡の敷地の南半部に東西30ｍ、南北10ｍの調査区を設定して調査を実施した。調査区の基本層序は、現地表から30～60㎝がコークスガラによる整地土、旧水田耕土及び床土（30㎝）、黄褐色粘質土の遺物包含層（10㎝）、黄灰色粘土地山層の順であり、旧耕土下約40㎝で黄灰色粘土の地山面に達する。地山面で、奈良時代に属する東西5間の東西棟の掘立柱建物1（SB 01）と土壙3（SK 02～04）、古墳時代の溝1（SD 05）と時期不明の東西溝2（SD 06～07）・土壙1（SK 08）等の遺構を検出した。建物SB 01は、土壙SK 02～04、及び包含層出土の土器・瓦片から奈良時代前半期に造営されたものと考えられる。桁行5間で、総長8.5ｍ。柱間寸法は1.7ｍ等間。梁行柱間寸法は2.3ｍである。北側柱列東第1～第4の柱穴には径18㎝前後の柱根が遺存している。最も保存状態の良好な東第3の柱根には樹皮の遺存が認められ、樹種鑑定の結果、シイの木であることが判明した。平城京内の住宅建築の用材としては、宮殿・寺院建築の場合と同じく針葉樹のヒノキが一般に用いられており、広葉樹のシイの黒木を柱材に用いたSB 01例は注目すべきものである。

調査区内にはこのSB 01以外に建物遺構はなく、京内の他の部分に比べて密度が低く、またその利用の時期が奈良時代の前半期に片寄ることが明らかになった。外京の利用状況の一端を示すものであろう。



第29図　左京三条五坊四坪発掘遺構図

9　左京四条二坊三坪の調査　第141－31次

調査地の東には菰川が南流し、対岸には推定田村第が存在する。調査は三坪の北東部に東西約25ｍ、南北約10ｍのトレンチを設定し、１月10日から１月27日まで実施した。

遺構は耕土・床土直下の地山（黄灰褐色粘質土）面で検出した。主な遺構には、掘立柱建物９棟（SB 01・02・07・10・11・12・13・14）、掘立柱塀２条（SA 05・08）、土壙１基（SK 06）のほか、旧流路（SD 03・04・15など）やその溜りがいくつかある。旧流路やその溜りは弥生時代や古墳時代後期に属し、その他の遺構は奈良時代に属す。奈良時代の遺構は大きく４期に区分できる。

A期　発掘区のほぼ中央部にある南北塀SA 08（９尺等間）を設け、その西に東西棟SB 12を配置する。SB 12は４間以上×２間で、東から２間目と４間目を仕切る。桁行・梁間とも８尺等間である。

B期　SA 08を廃して東西棟SB 01を設け、その南西に南北棟SB 10を配置する。SB 12はこの時期には廃絶していると考える。SB 01は床束が残ることから床張りの建物が、桁行７間に復原できる。南に庇が付くかもしれない。桁行・梁間とも８尺等間である。SB 10は東と西に庇が付く建物で、身舎の北１間分を仕切っている。桁行は11尺、梁間は身舎８尺等間、庇６尺である。

C期　SB 01をSB 02に建て替え、SB 12の位置にSB 13を建てた時期である。SB 02は４間以上×２間で、南に庇が付くかもしれない。柱間は桁行が９尺等間、梁間が9.5尺等間である。SB 13は３間以上×２間で、桁行８尺等間、梁間９尺等間である。

D期　SB 13とほぼ同じ位置でSB 14に建て替え、東辺はSB 02を廃して総柱建物SB 07と南北塀SA 05（６尺等間)を設けた時期である。SB 14は３間以上×２間で、桁行・梁間とも８尺等間である。SB 07は３間×２間の南北棟に復原できる。桁行は６尺等間、梁間は７尺等間である。また、SB 14の南で検出した２間以上×２間の小規模な東西棟建物SB 11（桁行５尺等間、梁間３尺等間）や方向の振

れる南北棟建物SB 09（梁間9尺等間）もこの時期に属す。

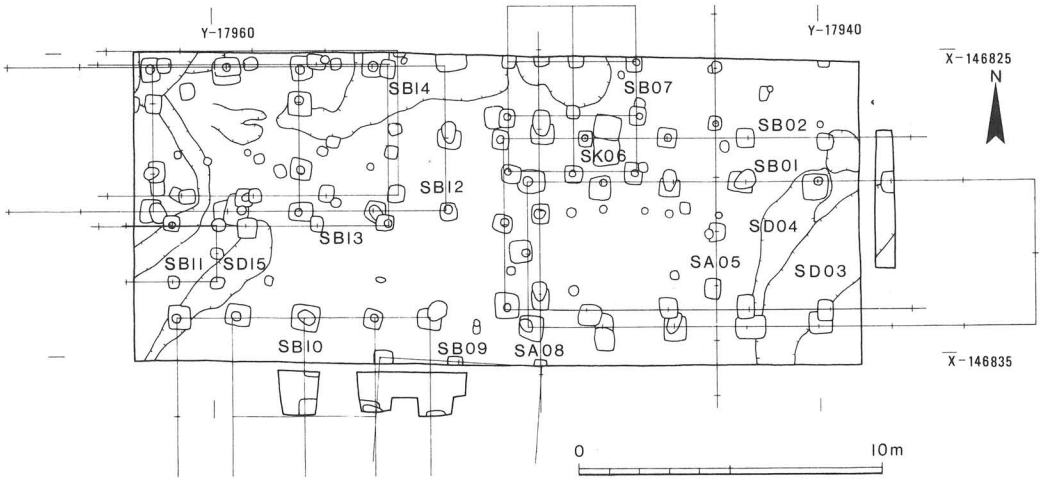
遺物は包含層が削平されていることから、柱穴や土壙SK 06から奈良時代の土師器、須恵器小片が少量出土したにとどまる。なお、SB 12の柱穴から施釉陶器片、SB 09の柱抜取穴から軒丸瓦6348型式各1点が出土した。

まとめ　A～D期の実年代については、出土遺物が少なく決め手に欠けるが、B期のSB 01の柱痕跡から奈良時代中頃の土器、C期のSB 02の柱穴から奈良時代後半頃の土器が出土しており、B期からC期への移行年代を奈良時代中頃から後半までの間に置くことができる。A期は奈良時代前半頃、D期は奈良時代末頃に比定できよう。

A期の南北塀SA 08は三坪の坪東端から四分の一に位置する。この塀が宅地の東限を示すのか、宅地内の一区画なのかは今後の調査で解明せざるをえない。

B期のSB 01・10は、その配置や規模からみて、主殿と脇殿と考えられる。SB 10の桁行を4間とみた場合でも、その南妻は坪北端から四分の一位置をこえる。この時期の宅地は少なくとも三坪の北東四分の一町を占めていたことになる。

C期はB期を継承するが、次のD期は比較的小規模な建物が建ちならび総柱の倉庫風建物が加わるなど様相が変わる。宅地内の建物配置の変化なのか、宅地割りそのものが変わったのか、これからの調査で明らかにしていく必要がある。



第30図　左京四条二坊三坪発掘遺構図

10　左京四条二坊十五坪（田村第推定地）の調査　第145次

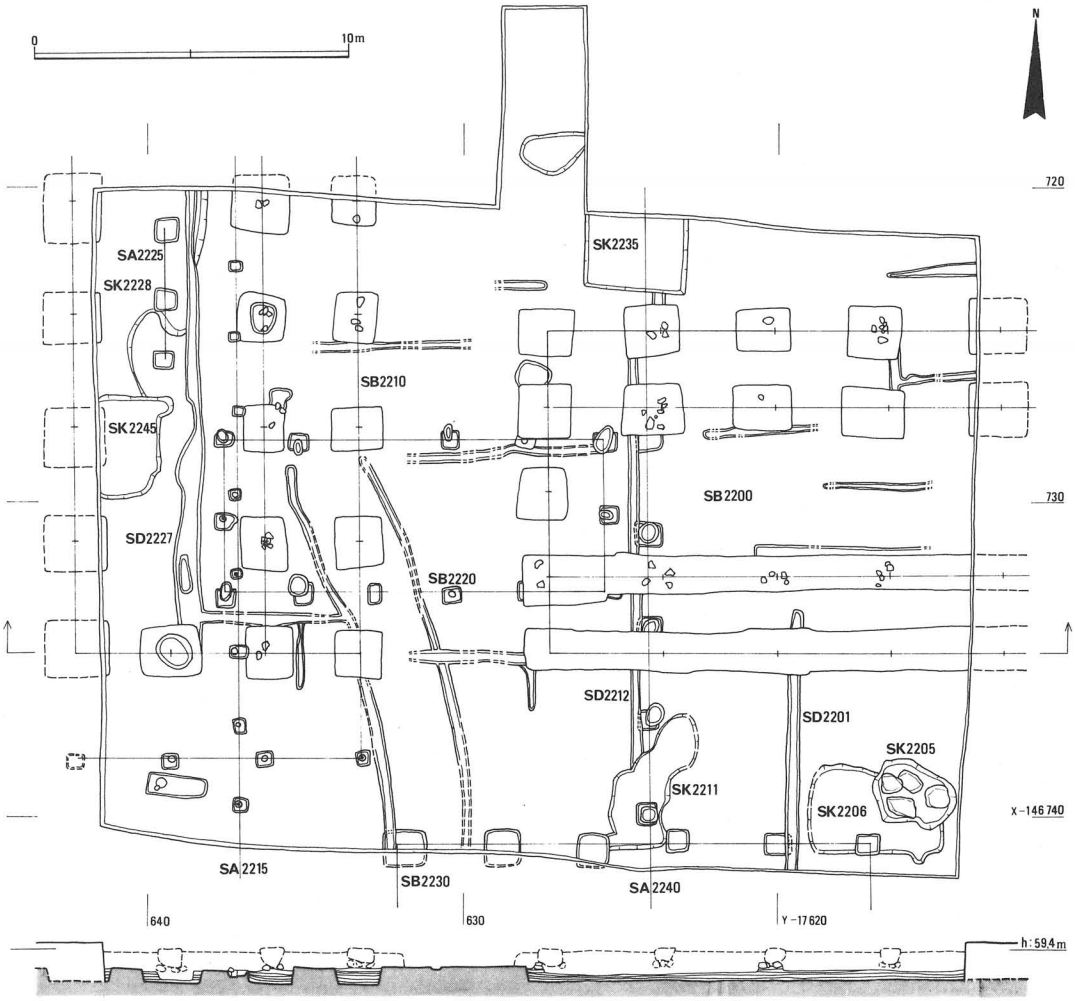
本調査は住宅地造成工事に先立つ事前調査で、十五坪内の状況を把握する目的で行なった。また調査地周辺は、岸俊男氏によって、奈良時代中頃に正一位太師（太政大臣）にまで至った藤原仲麻呂の邸宅である田村第に推定されており、田村第に関連する遺構の存否の確認も、その目的の一つであった。

調査地は南流する佐保川と菰川に挟まれた沖積地であるが、現状はスクロール化した住宅地となり、水田・更地はごく小面積になってしまっている。

遺　　構　検出した主な遺構は建物4棟・掘立塀3条・土壙6基・溝である。遺構は切り合い関係から3時期以上の変遷が認められる。

A期　掘立柱建物SB 2220は桁行5間・梁間2間、8尺等間の東西棟。柱は柱根が残存するものと、抜取られたものとがある。掘立柱建物SB 2230は桁行5間10尺等間の東西棟。北の側柱筋だけを確認した。掘立柱塀SA 2240は10尺等間の南北塀で、柱抜取痕がある。SA 2240はSB 2220と接近しすぎ、またSB 2230とも重複するため、これらの同時併存は考えられない。SB 2220とSB 2230も配置関係からみると併存は考えがたい。A期の中でも3回の変遷がみとめられる。

B期　礎石建物SB 2200は、桁行5間以上、梁間4間の南北に廊をもつ東西棟建物。桁行は12尺等間、梁間は身舎9尺等間、廊の出は8尺である。南側柱・入側柱筋は巾約1.5 *m*の布掘地業を行い、他は一辺約1.5 *m*の方形の坪掘地業を行っている。礎石はすべて抜き取られており抜取穴には礫・瓦塼類が捨てられていた。礎石建物の布掘地業の類例として、平城宮のSB 5300（第37次調査）をあげることができる。礎石建物SB 2210は桁行5間以上、梁間3間以上の少なくとも東廂をもつ南北棟建物。桁行12尺等間、梁間は身舎、廂とも10尺である。すべての柱位置には一辺約1.5 *m*の方形の坪掘地業が行われるが、礎石はすべて抜取られている。建物の南側には11尺の出で掘立柱の縁が付される。柱掘形は約0.6 *m*の方形で柱根を残すものもある。掘立柱塀SA 2225は2間の南北塀で7尺等間である。SB 2210の棟通りに位置するため、あるいはSB 2210と関連するものかもしれな



第31図　左京四条二坊十五坪発掘遺構図

い。SB 2200とSB 2210は南面の柱筋を揃え、建物の間隔は柱心心で20尺であり、一連の建物と考える。また、SB 2200・2210の地業は遺構検出面から30～50㎝の深さから行われている。SK 2205からは径が1㎡大の三笠山安山岩3・溶結凝灰岩1を検出したが、これらはSB 2200またはSB 2210の礎石であろう。SB 2200の北側にトレンチをのばし、建物の存否をさぐったが、調査区内では確認できなかった。

C期　掘立柱塀SA 2215は9間以上の南北塀で、柱間は8尺等間である。掘形は約0.5㎡の方形で柱根を残すものもある。

遺　　物

土器・瓦が多数出土しているが、大多数が、後世の溝からの出土である。 SB 2200 の南側柱筋の礎石抜取から軒平瓦 6670 A（新型式）が出土している。文様構成からみて平城宮軒瓦編手のⅢ期に相当するものであろう。土壙 SK 2206からは和同開珎が12枚、重なった状況で出土した。

ま と め

岸氏の考察によれば、田村宮・藤原仲麻呂の田村第は左京四条二坊九～十六坪で、坊の東半を占める。この地域での調査は従来行なわれておらず、本調査が初めてである。田村第と本調査の成果はいかに関わるのであろうか。

今回検出したＢ期の建物 SB 2200、2210 は京内では例をみない大規模なものであり、Ｂ期の時期は、建物が切りこむ整地土・溝から出土した土器、礎石抜取から出土した瓦からみて奈良時代中頃と考えることができる。次に、北方の現奈良市役所の調査で検出した左京三条二坊十坪と十五坪の坪境小路心から、朱雀大路の方眼北に対するＮ15′41″Ｗの振れを加味して今調査地近くでの十・十五坪の坪境小路心を推定すると註２のようになる。小路溝心心巾６ｍとして、延喜左右京式京程条にみられる犬走３尺・垣基５尺・溝巾の半分 1.5 尺と溝心心巾の半分３ｍを加算してみると、もし、SB 2210に西廂が10尺の出で設けられていれば、側柱筋は築地とほぼ接することになる。西廂がなかったとしても軒の出を６尺としてみると、建物と築地の軒先はほぼ接してしまう。このような情況はＢ期においては、十・十五坪間の坪境小路は存在せず、少なくとも東西に接する十・十五坪の２坪は区画されず、一連の宅地であった可能性がきわめて高い。

平城京の宅地の班給基準については、知られておらず、表２に示した藤原・難波京のものから類推せざるをえない。１町以上の宅地は難波京に例がなく、藤原京の場合を準用すれば、従四位下以上ということになる。仮にこの宅地が２町以上に広がるとすれば、今調査地は仲麻呂の田村第の一部となる可能性が大きい。しかし、藤原南家・北家が、居住地の位置関係からの呼称であるとすれば、この地を仲麻呂の父、右大臣武智麻呂以来の南家の宅地と考えることもできる。だが、

武智麻呂は3兄弟とほぼ時を同じくして天平9年（739）に死亡しており、遺物からみた年代観よりは若干さかのぼるのも事実である。また、田村第は天平宝字8年（764）の仲麻呂斬死以後も、宝亀6年（775）から延暦3年（784）まで田村旧宮・田村後宮・田村第などの名称が『続日本紀』にあらわれ、そこで宴会が行なわれた記事が認められる。仲麻呂斬死以後も、旧田村第は使用しつづけられたのであろう。

このように、B期の建物には上述の三つの可能性が考えられるのである。そのいずれにしても、最低2町分の宅地という大規模宅地内における機能分化を考えざるをえないであろう。そのような観点からみれば、今調査地は所謂「コの字」配置を想起させる整然とした配置の大規模な礎石建物群であることから、政所的な機能を有していた可能性があろう。家令職員令によれば、二位の家政機関は小司に準じた規模を有するのである（表2）。ちなみに、田村第の文献的初見は天平勝宝4年（752）4月の大仏開眼会の際であるが、その2年前に仲麻呂は従二位に任じられている。

1　岸俊男「藤原仲麻呂の田村第」『日本古代政治史研究』1966.『藤原仲麻呂』1969.

2　左京三条二坊十・十五坪間小路心　X＝－146,190.580　Y＝－17,653.825

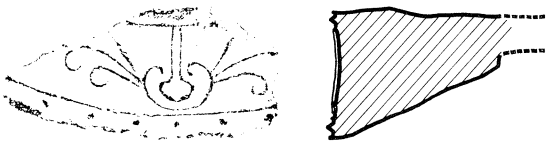
　　左京四条二坊十・十五坪間小路心（推定）X＝－146,730　Y＝－17,651.364

表1　藤原京・難波京の宅地班給例

藤原京の宅地（持統5年12月）			難波京の宅地（天平6年9月）	
右大臣（従二位）		4町		
直広弐（従四位下）以上		2町	三位以上	1町以下
大参（正五位上）以上		1町	五位以上	½町以下
勅（正六位上）以下	上戸	1町	六位以上	¼町以下
〃	中戸	½町		
〃	下戸	¼町		

表2　家令職員令

	家令	扶	従	書吏
一位	1	1	大・少	大・少
二位	1		1	大・少
正三位	1			2
従三位	1			1



第32図　十五坪出土軒平瓦

11　左京四条三坊十二坪の調査　第141－29次

マンション建設予定地の事前調査。調査地は表記の場所にあたり、幅5ｍ、長さ20ｍの東西トレンチを設定した。旧水田耕作土上に約1.4ｍの盛土があり、耕作土下の床土・遺物包含層はともに浅く、遺構面は耕作面下約30㎝に検出した。

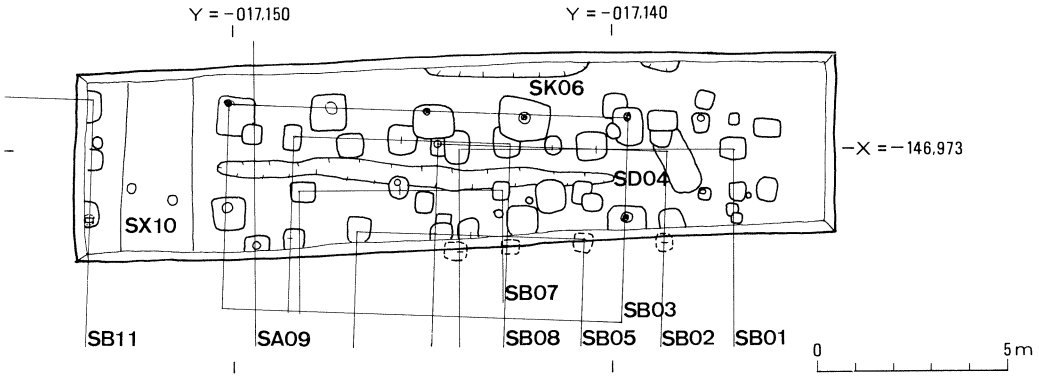
検出した主な遺構は、掘立柱建物7棟、溝1条、土壙1基等である。

掘立柱建物はSB 01・02・03・05・07・08の6棟が同位置で重複しており、少くとも6期の改築が認められる。これら6棟のうち、SB 03を除く5棟が南北棟で、柱掘形の大きさからみて小規模な建物と思われる。SB 03の柱掘形は最も大きく、柱根を残す。柱根には下端部で15㎝厚、上端部で5㎝厚の根巻粘土を施す。SB 03とSB 11は北側の柱筋を一致させた同時期の建物と推定される。SB 03の坪内の位置は、坪を四等分した東北4分の1町のほぼ中央にあり、したがって、SB 03を$^{1}/_{4}$町宅地の主屋、SB 11を副屋とする配置が考えられる。

	桁行×梁間 間	柱間寸法(尺) 桁行	梁間	
SB01	－×2	9	12	南北棟
02	－×2	8	10	南北棟
03	4×(2)	9　8.5	9	東西棟
05	－×2	－	10	南北棟
07	－×2	－	9	南北棟
08	－×2	9	9.5	南北棟
11	－×－	10	－	南北棟

発掘区西端に検出した溝状遺構SX 10は、幅1.9ｍ、深さ0.3ｍ程の溝状掘込みと、固く締った埋土の状況から掘込地業と考えられる。SX10とSA 09は坪内を4等分する位置にあるものとすれば、$^{1}/_{8}$町を限る塀跡とすることができる。

出土遺物は土器の細片が多かったが、すべて奈良時代のものである。



第33図　左京四条三坊十二坪発掘遺構図

12　左京九条三坊三坪の調査　第148次

調査地は三坪の北半中央部にあたる。調査地の層序は、耕土・床土下に中世の遺物を含む灰褐色砂質土（厚さ30～40㎝）があり、その下は地山の灰色砂や黄褐色粘質土の遺構面となる。遺構面は西と南に向って次第に低くなっている。

検出した主な遺構には、掘立柱建物9棟（SB01・02・06・07・09・10・11・14・15）、掘立柱塀1条（SA05）、土壙2（SK03・04）、溝3条（SD08・12・13）がある。これらは古墳時代と奈良時代とに区分できる。

古墳時代の遺構　調査区の南端部で検出したSK04は不整形な土壙で、南西方向に流れ出る溝を伴なう。布留式土器が少量出土した。SK03や調査区の西端中央で検出した総柱建物SB07も同じ時期と考えられる。SB07は桁行3間2.2ｍ等間、梁間2間2.9ｍ等間である。SD08・13はSB07の北と南にある溝状遺構である。

奈良時代の遺構　大きくはA・B両期に区分できる。A期には、調査区中央部で検出した5×5間の東西棟SB06と、これに中軸線を揃えて北約50尺に位置する7×2間の東西棟SB10とがある。SB06は桁行が9尺等間、梁間が身舎6尺等間、庇10尺等間である。身舎には2時期の床束が残り、床の張り替えを行ったことがわかる。SB10は桁行8尺等間、梁間9尺である。

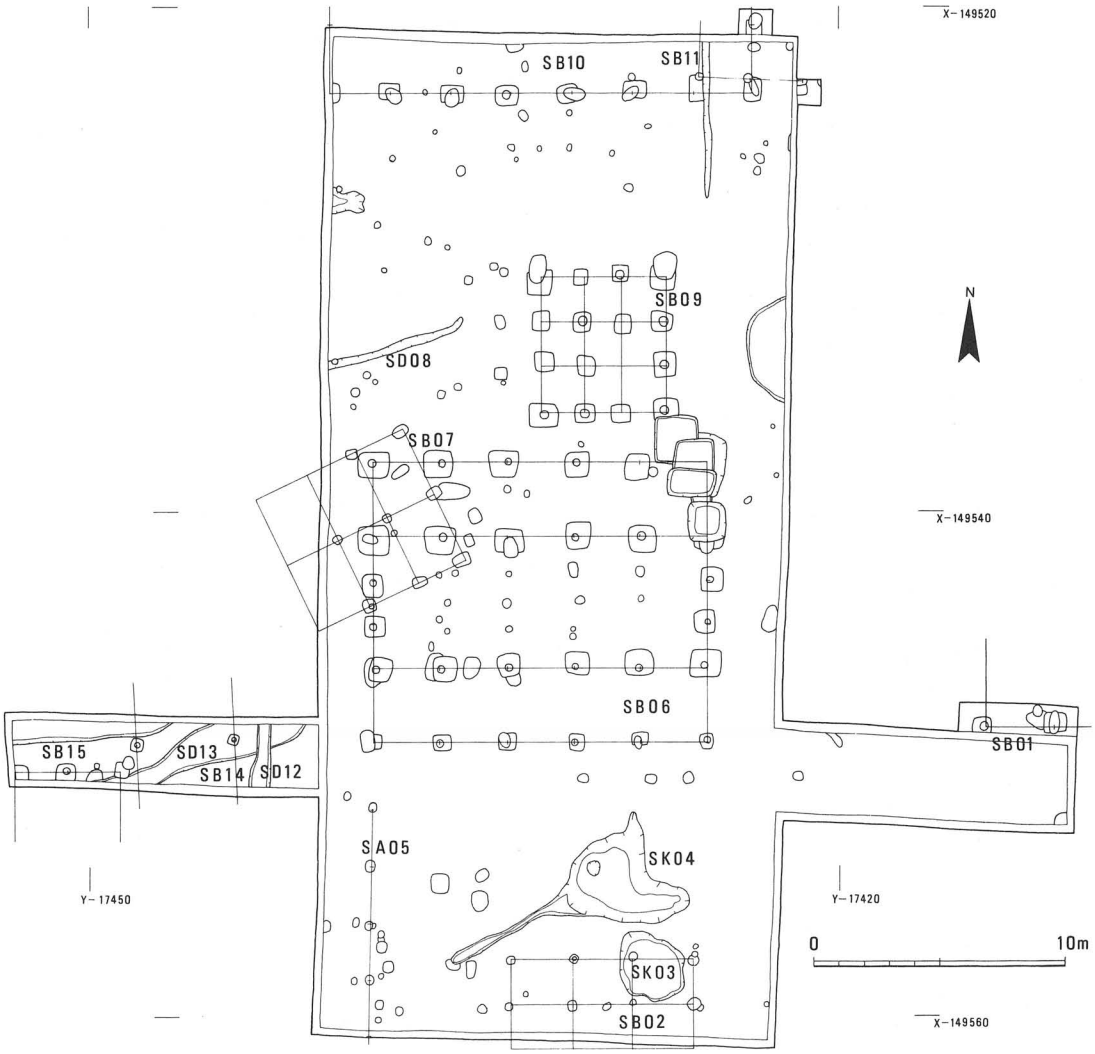
このほかSB06の北約2ｍには3×3間の総柱建物SB09（桁行6尺等間、梁間6・5・6尺）、東約11ｍと西約10ｍには南北棟と考えられるSB01（梁間9尺）やSB15（梁間7尺等間）があるが、SB06とは近接しすぎていたり、柱通りが揃わなかったりする点から一時期の計画配置とみるのには問題が残る。その細分については今後の課題としたい。なお、SB06の西にある南北溝SD12も出土遺物からみてA期に属す可能性があるが、性格は明らかでない。

B期には調査区南端で検出した3×2間の総柱建物SB02（桁行8尺等間、梁間6尺等間）、北端のSB11（柱間7尺）、西端の南北棟SB14（柱間13尺）のほかに南北塀と思われるSA05（4間分検出、7.5尺等間）がある。

遺物は奈良時代の遺物包含層が削平されたためか土師器・須恵器及び瓦の小片

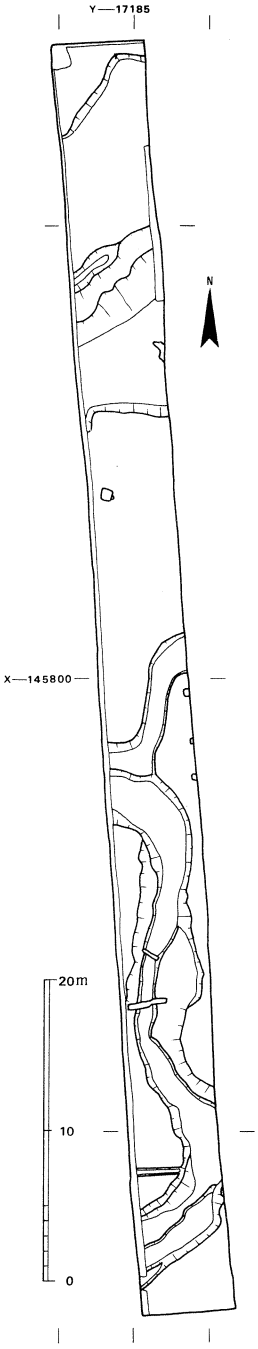
が少量出土したにすぎない。このうちには軒丸瓦6285Aが1点ある。

まとめ　A期のSB 09の柱抜取穴から奈良時代中頃の土器、B期のSB 02の柱穴から奈良時代後半頃の土器が出土しており、A期は奈良時代前半、B期は奈良時代後半に比定できる。このうちA期はSB 06・10を南北に並べ、しかもSB 06をほぼ坪の中心に位置させていることから、一町の宅地を占有し、建物を整然と配置していたことが推測される。B期の建物は小規模でまとまりに欠け、様相が一変する。三坪の特殊事情なのか否か周辺の調査をまって解明する必要がある。



第34図　左京九条三坊三坪発掘遺構図

13　九条大路および京南辺部の調査　第141－8次



第35図　発掘遺構図

北和木材協同組合が計画した資材置場造成に伴う事前調査である。調査地は羅城門跡の東方約250ｍに位置し、平城京九条大路および京南条里にかかわる遺構の存在が予測されたが、検出したのは奈良時代の東西溝１および古墳時代の溝１のみで、京南辺を画する施設や京南条里に関する遺構は発見できなかった。

奈良時代の東西溝は発掘区北端近くで検出したもので、幅約６ｍ、深さ0.5ｍ内外の浅いＵ字形をなす素掘り溝である。位置的にみて九条大路南側溝の可能性も捨て切れないが、京の外濠としては浅過ぎよう。埋土から若干の瓦片が出土しており、奈良時代の溝であることには間違いないのだが。この東西溝の下層には、厚くかつ幅広く砂と粘土が互層をなし、もと自然の流路があったと思われる。西壁土層の観察によると、幅約16ｍ、深さ1.5ｍほどあるが、無遺物のため年代はよくわからない。

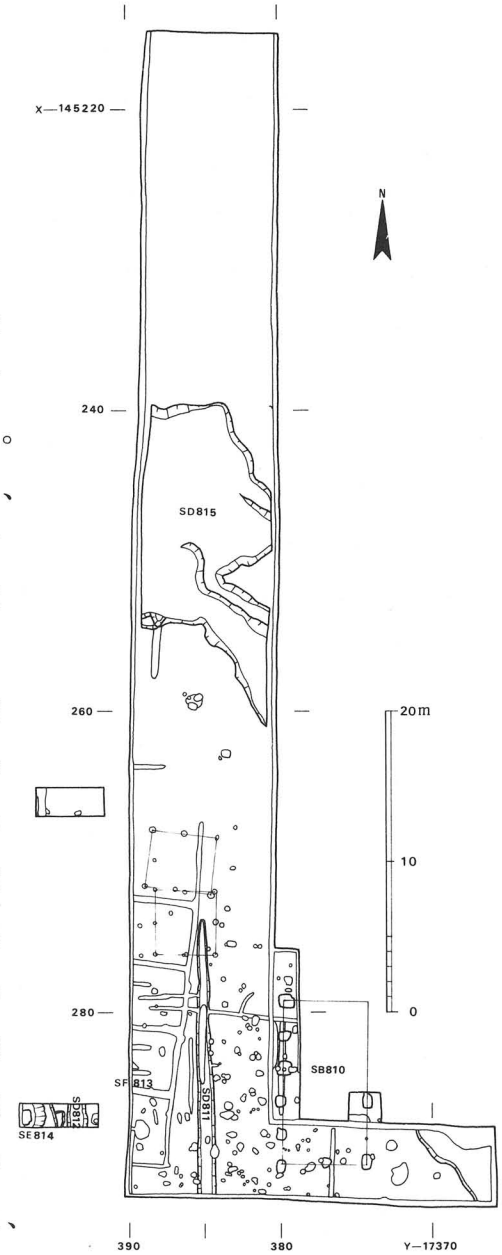
発掘区の南半部は、古墳時代の流路によって占められていた。複雑に曲折し、各所で支流を受け入れており、どちらの方向に流れていたかは不明である。埋土から古墳時代の土師器（布留式の古い段階のもの）や流木が出土した。土師器にはＳ字状口縁をもつ小形丸底椀、小形丸底壷、小形器台、円筒形の頸部から水平に広がり、さらに外反しながら立ちあがる複合口縁をもつ壷形土器、甕などがある。流木は樹種鑑定の結果、コナラ亜属に属する樹木であることが判明した。

14　右京一条二坊六・十一坪の調査　第142次

商業ビル建設に伴う事前調査。調査地は右京一条二坊六坪と十一坪にまたがり、二条条間路南側溝および六・十一坪境の坊間路等が予想された。また、敷地東側に接して秋篠川が南流し、東部は氾濫で遺構が破壊されている可能性があった。

検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物1、井戸1、南北道路および両側溝、平安時代頃と思われる掘立柱建物2以上と小柱穴群多数、旧河川1などがある。調査区北半では、後世の削平のため遺構は皆無であり、条間路南側溝は確認できなかった。

掘立柱建物SB 810は桁行5間（10.8m）、梁行2間（5.8m）の南北棟建物で、柱間寸法は桁行7尺等間、梁行10尺等間の大規模なものである。柱掘形も方0.7～0.9mと大きい。南北溝SD 811は発掘区のほぼ中央南部で約18m検出した。以北は削平のため痕跡をとどめない。断面U字形をなす素掘りの溝で、南端で幅1.2m、深さ0.2mを測る。南北溝SD 812は西南トレンチで一部分を検出した。幅約0.7m、深さ0.1mの浅い素掘りのU字溝である。SD 811から出土した土器は平城宮土器編年Ⅲ～Ⅴ期のもので、奈良時代の溝であることが確実であること、SD 811の方位がほぼ国土方眼と一致すること、SD 812との心心距離が約8.6mと3丈に近く、



第36図　右京一条二坊六・十一坪発掘遺構図

坊間路としてふさわしいこと、また第103－14次調査で判明している西一坊大路心からSD 811・812の心までの距離が約270ｍであることから、両溝で挾まれた部分は西二坊間路（SF 813）とみなせよう。路面幅は約7.6ｍとなる。

SE 814は西南トレンチ西端で検出した井戸である。その東半部を発掘し得ただけなので全体の規模は不明だが、かなり大きめの掘形内に4隅に杭を打ち縦板を組んだ井戸枠をもったものと思われる。深さは現地表から2.6ｍ以上ある。井戸枠内埋土から奈良時代後半の土器が出土している。

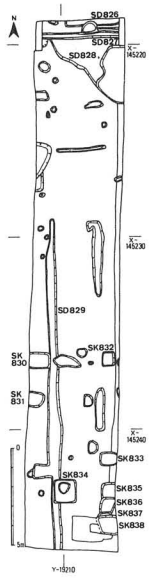
発掘区の南1/3ほどには、坊間路路面上を含めて、多数の柱掘形や土壙が存在する。掘形の中には柱根の遺存するものもあるが、すべて径20㎝以下の小形のもので、建物としてまとめられるのは分布の北部にあるSB 816・817の2棟に過ぎない。これら柱穴群は京廃絶後のものであるが、瓦器を含むものは少なく、大部分は平安時代の内におさまるものと思われる。

出土遺物には瓦塼類、土器類などがある。軒瓦は6点あり、軒丸瓦3（6133型式2、6225Ｃ型式1）、軒平瓦3（6761型式2、6663Ａ型式1）で、西隆寺創建瓦である6761型式2点の存在が注目される。他は平城宮所同瓦の仲間である。土器は多量に出土し、特にSD 811、SE 814からは平城宮土器編年Ⅲ～Ⅴ期を中心としたものが出土した。ほかに、SD 811から土馬が1点、また小柱穴からは土師器のほか黒色土器や瓦器が若干出土した。

15　右京一条二坊三坪の調査　第141－14次

駐車場建設に伴う事前調査。当該地は右京一条二坊三坪にあたり、一条条々間路の存在が予想された。発掘区は東西5ｍ、南北27.5ｍに設定し、条間路の検出を目指した。検出遺構は溝4条－土壙40基がある。SD 826・827は一条々間路南側溝の推定位置にあるが、深さが僅か5㎝と浅い上に遺物がなく、南側溝と積極的に認定できない。

SK 834は古墳時代の土壙で、埋土から布留式土器が少量出土。総じて遺物の出土量が乏しいため、各遺構の時期を明確にできない。



第37図　三坪遺構図

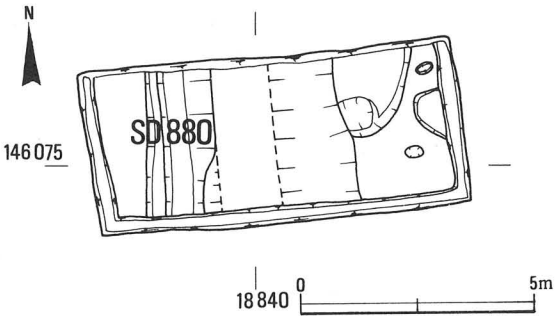
16　右京三条一坊八坪の調査　第141－4次

本調査は、住宅改築に伴う事前調査である。当該地は右京三条一坊八坪および西一坊々間路東側溝推定地にあたる。発掘面積の関係から、西一坊々間路の検出を目的に、東西8ｍ、南北3.5ｍの発掘区を設定した。発掘区には宅地造成による盛土が約1ｍあり、以下旧耕土、床土、および暗青灰粘土、青灰粘土と移行する。奈良時代の遺構は暗青灰粘土層の上面で検出した。

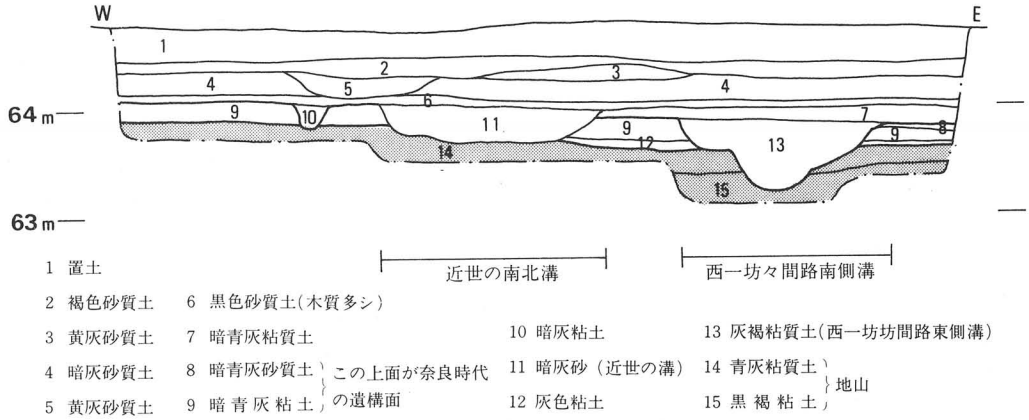
検出遺構は、西一坊々間路東側溝と考える南北溝SD 880と、小掘形3である。SD 880は幅約1.8ｍ、深さ0.7ｍの素掘で、溝の両肩には一段段がつく。土層断面の観察によると、SD 880は地山の青灰粘土層を埋めた青灰色又は灰色粘質の整地層を切りこんでいる。護岸等の施設は検出できなかった。溝の埋土は瓦片を多量に含む。堆積の状況からみて、急激に埋没したようである。

出土遺物には軒平瓦6663－A型式1点、須恵器2点等がある。

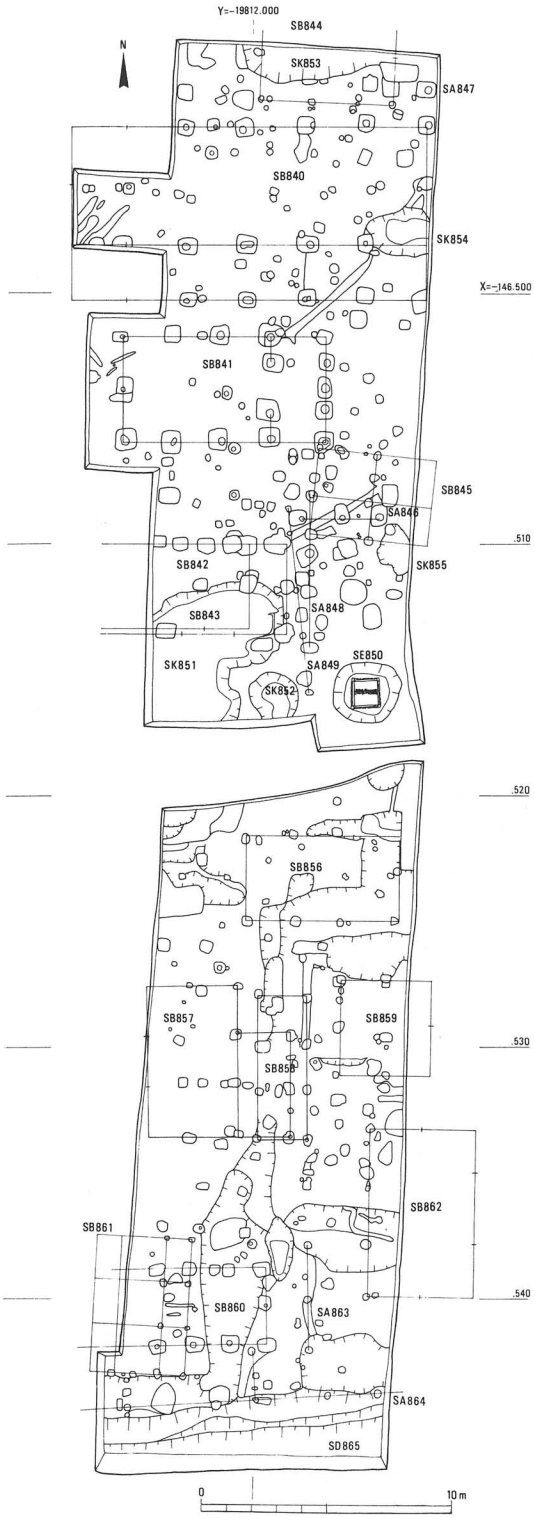
平城宮南面西門（若犬養門）の中軸線が西一坊々間路心に当ると仮定すると、SD 880と坊間路心との距離は約10.8ｍとなり坊間路の幅員は溝心々で約21.7ｍ（73尺）に復原できる。



第38図右京三条一坊八坪発掘遺構図



第39図　発掘区南壁土層東西断面図



第40図　右京三条三坊五坪発掘遺構図

17　右京三条三坊五坪の調査

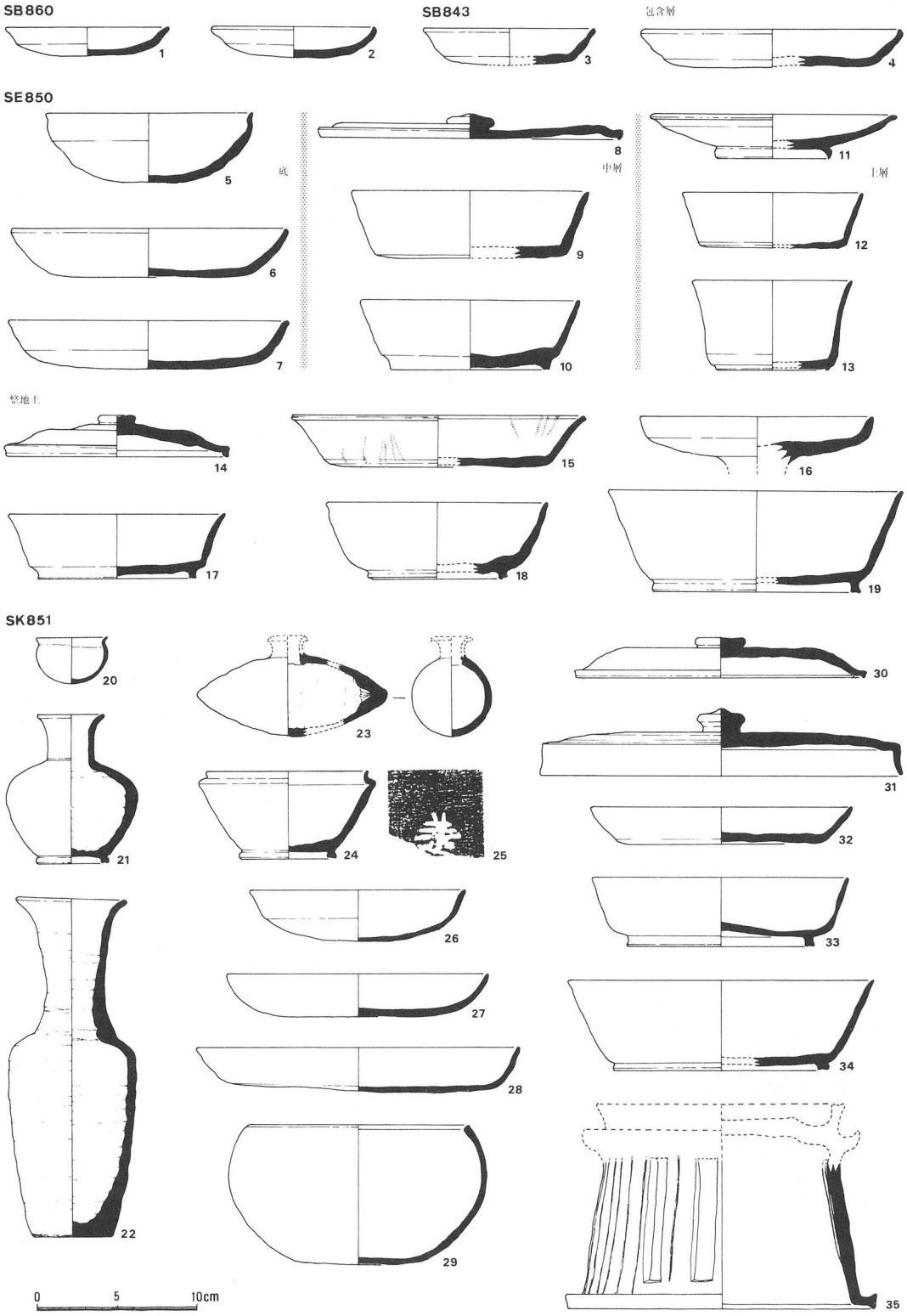
第 141 －26次

マーケット建設に伴う事前調査。三条大路北側溝と五坪の遺構検出をねらいに発掘した。検出遺構は奈良から鎌倉時代に及び、掘立柱建物11、塀５、土壙などがある。主に奈良・平安時代の遺構について述べる。

北区　奈良後半に南廂建物 SB 840が主屋的位置を占める。次に東西棟 SB 841 が建つ。東１間分に間仕切の柱がある。東西棟SB842は前者に、SB 843 は後者と併存すると考える。SB 843 を切る土壙 SK 851の出土遺物からみて、以上の建物は平安初期に廃絶した。井戸 SE 850 は二期に亙る。

南区　東半部に８世紀中葉の整地層があり、SB 859 などはこの層上にある。SB 860 を除き遺物に乏しいが、いずれも平安時代に降ると考える。SB 860 は４間以上２間の東西棟。東北隅の柱掘形から地鎮に用いた平安末の杯が12点出土。SB 857 は３間２間の南北棟。東に２間分の廂がつく。SB 859 はＬ字状の塀の可能性もある。発掘区が挟く、遺構配置は不明な点が多い。

目的であった三条大路北側溝は中世の溝 SD 865と重複、未検出である。中世の遺構は他に SB 861・862・864・865。SA 863・864・849などがある。柱掘形は小さい。



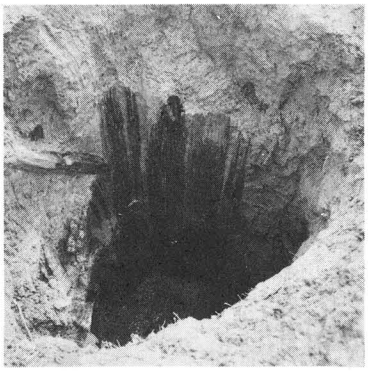
第41図　発掘区出土土器　土師器1～7　20，26～29　須恵器8～10，12～19
灰釉11，21，22，23，24，30～34　25須恵器杯蓋内面刻印　陶硯35

18　右京六条三坊十坪の調査　第147次

本調査は、国家公務員合同宿舎建設にともなう事前調査である。調査地は薬師寺西方の丘陵地であり、丘陵地における奈良時代の居住地造営の状況把握を目的とした。調査は、建物建設予定地を中心とし、東北部に主調査区1カ所、西半部に小トレンチ2カ所を設定して進めた。

主調査区は、後世の大規模な削平を受け、検出面はおおむね粘土質の地山であり、奈良時代の遺構は井戸と土壙各1を検出したにとどまった。 井戸は正方形（1辺1.6ｍ）の掘形に竪板を組んだものであり、改修が行われている。枠板は東面と南面にのみ残っている。調査中に、西・北面の壁面の崩壊があり、検出面から3.2ｍの深さまで掘り下げたものの、井戸底に至らなかった。調査終了後、チェンブロックによって引き抜いた枠板は幅25㎝、長さ5.7ｍという長大なものであった。埋土から8世紀半ばの土器類若干と、重圏文軒平瓦1点が出土した。

土壙は円形（直径3ｍ、深さ1.6ｍ ）で、井戸の東北5ｍの位置で検出した。埋土中から八世紀前半の土器片が大量に出土したが、土壙の性格は明らかでない。あるいは、井戸として掘りかけたものであったかもしれない。西方の調査区では、北トレンチで小規模な柱掘形（1辺0.3～0.4ｍ）を5個検出したが、建物としてまとめることはできなかった。南トレンチでは奈良時代の土器の包含層が部分的に残っていたが、後世の溝や土壙などによる撹乱がいちじるしい。



第42図　十坪検出の井戸

調査地は、総体的に後世の削平がいちじるしい。しかし、この地域で井戸や、土器を多量に含む土壙を検出したことは、この地が生活の場として活用されていたことを示す。遺憾ながら建物遺構を検出することはできなかったが、それは後世の削平が掘立柱掘形をも全く残さないほどいちじるしいことを示している。かろうじて残った井戸は、調査で確認した深さより、少なくとも1ｍ加えねばなるまい。